巻 頭 言

新型コロナウイルス感染症の拡大によって，私たちは，一年と少し前には想像しなかった異質な世界に呑み込まれた．新しい生活様式の中によい部分がないわけではないが，過去に当たり前だった日常の多くについて，失うことへの抵抗感は大きい．

一方，自然科学においては，過去の当たり前が覆されることは，ふつう，素晴らしいことである．うれしいことに，惑星科学の世界には，本学会発足（1992年4月）からの30年ほどの間にも新展開や通念の塗り替えがおこってきた．中でも，太陽系外縁天体と太陽系外惑星の発見，および，海外のものも含めた小天体探査の印象が，個人的には特に強い．ここでは前者に対する思い入れの背景を述べたい．

目覚ましい数の外縁天体探索と研究成果の契機となった1992QB1の発見者のひとりは，同世代のJane Luuである．発見すぐの1993年の国際会議で会い，称賛と憧れの念を抱いた．少し遡り，1989-1990年頃，大学院生の私は，研究室の将来計画の議論の渦中に放り込まれた．太陽系のでき方の研究を物理学教室の中でおこなうことについて，太陽系はひとつしかない，ひとつしかないものを対象とするのはむしろ歴史学であり物理学ではないということが語られた．それからわずか数年後に太陽に似た恒星の周りを公転する系外惑星が見つけられ，今や多様な惑星系が観測的に実証され，この多様性を解き明かそうとする研究も盛んである．2019年にノーベル物理学賞が系外惑星発見の功績に対して与えられたことは，惑星科学にとって記念すべきことであった．

惑星科学を語る場は拡がった．生物学者を巻き込んだ太陽系内外の天体の生命居住可能性についての研究も珍しくなくなった．30年後の惑星科学がどうなっているのか，予想もつかない．

中村昭子（神戸大学 大学院理学研究科）